

『雪解け』

著作 a s h

※この話は『kanon』を元にした二次創作です。

ものみの丘で約束を確認してから数日後のこと。

俺はのんびりと家への帰り道を歩いていた。

まだ少し肌寒さも感じるものの、一日ごとに春の気配は強まるばかりで、真琴もそれに合わせるように、相変わらず元気に過ごしている……と言うと聞こえはいいが、要するに毎日遊びほうけてるのだ。

俺がこうして毎日学校へと通ってるのに、あいつと来たら昼間はびろと遊んだりしてるだけなんだから、お気楽なもんだと本当に思う。もつとも、真琴はそうしてる方が似合ってると言うのも……確かにあるだろうな。

「祐一っ！」

ととっ……。

俺の背後から、いきなり威勢のいい声。

もちろんその主が誰なのかは言うまでもないし、そいつが今どんな表情をしてるのかも俺には分かっている。噂をすれば何とやら……と言うやつだ。

「何か用か？」

『雪解け』

声の主：真琴に向かって訊きながら、くるりと俺が振り返ると……

ベシヤッ……と言う音とともに、かすかな痛みと冷たさを顔面に感じながら、俺の視界は真っ暗……いや、真っ白になった。

「あはははっ！ 引っかった！」

さも嬉しそうな真琴の声。

俺は顔についた雪玉の残骸をゆっくりと払いながら、

「真琴、こんなくだらないイタズラはきょうびのお子様でもやらないぞ。それに、相手か俺じゃなかったら、お前どうなってるか分かるのか？」

と、余裕を持って真琴に注意をした。どうせ真琴のことだから、正面切って俺が怒ったところで、それを楽しむだけに決まっているからな。

「こんなのに引っかかるのは祐一くらいだから、真琴は平気だもんっ」

まったく懲りてない調子で、真琴が笑いながら答えた。そんな風に笑っているのも相手が俺ならでは……ってことくらいは俺にも十分理解できるし、まあ、それはそれで悪くはないんだけどな。

「だいたい、こんな雪玉どこで作ったんだよ？」

あらかたの雪を落として俺が改めて真琴の方を見ると、真琴は楽しそうに笑いながら短く答えた。

「商店街の道ばたよ」

こいつのことだから、コンビニへ肉まんを買いに行つてたに違いないが、春本番はまだとは言っても、しばらく暖かい日が続いていたせいもあって、そんな雪が残つてるとは思

『雪解け』

えない。

「まだそんな雪が残っていたか？」

俺が訊き返すと、真琴は少しだけ首を傾げながら答えた。

「よく分からないけど、道に雪が落ちてたの」

「ああ……トラックか何かが落としてったヤツだろ、多分」

「ふうん……。ところで、祐」

それで納得したかどうかはよく分からなかったが、真琴は不意にため息混じりに切り出した。

「何だよ？」

俺が短く返すと、真琴は俺の方にすっと近寄って、

「学校って楽しい？」

と、上目遣いに訊いてくる。

「いきなり何だよ、そりゃ」

「ううん…別に」

そんな風にいきなり質問されたところで、俺には真琴の本心がよく分からなかった。が、逆に俺が訊き返すと、真琴は言葉を濁してしまう。

こんな風な曖昧で半端な態度を見せる…ってのは、真琴がそれに対して少なからず興味を持つてる証拠だ。

「お前、もしかして学校に行きたいのか？」

「えっ…うっ、ううん。真琴、学校なんて行きたくないわよう」

『雪解け』

俺の問いかけに対して、真琴は体じゅうで精一杯の否定をしてみせる。が、それをそのまま受け止めるのは、まさに愚の骨頂だ。…それにしても相変わらず素直じゃないな、こいつは。

「今までさんざん遊んでいたかと思えば、いきなりそれか？」

「あうーっ…好きで遊んでいたわけじゃないわよう」

まあ、真琴の言う「好きで遊んでたわけじゃないっ」てのは、納得できたりするんだ。いくらぴろと一緒にいると言っても、結局はずっと一人でいるのが寂しいってことに違いないからな。

「で、学校がどんなところか分かってるのか、お前は」

「…祐一が行ってるところ……」

「それだけじゃねえよ」

「あと…美汐ちゃんも行ってる……」

「美汐ちゃん!?…って、いつの間にそんな風に呼ぶようになったんだ？」

「どうでもいいじゃない、そんなこと…」

いや、まあ、確かにこの際それはどうでもいいことだよな。名前の呼び方については後で天野に訊いてみれば分かることだし。

それにしても、俺と天野の名前は出ても名雪が出てこないのが、いかにも真琴らしい。そんな風に人見知りの激しさも相変わらずなくせに、学校に行きたいなんて言うからには、こいつもこいつなりに色々と思うところがあるって言うことだし、俺としてはそれはそれで嬉しいことだ。

『雪解け』

「どっちにしても、秋子さんに相談しないとな」

「秋子さんに？」

「ああ」

「もしたら、真琴も学校に行けるようになるかなあ？」

俺に向かってそう尋ねる真琴の表情は、明らかに期待の色に染まっていた。

さっきから見ると、頭が下がったり上がったりしてて実に面白い。でも、俺がその期待に応えるような返事をするわけにも行かないのだ。

「それは分らないな」

正直言つて、真琴がそのまま俺たちの学校に行けるかどうか…かなり難しいと思う。単に勉強の出来不出来だけではすまされない問題もあるのだから、その根は深い。

「そっかあ……」

「でも、可能性がないわけじゃないんだから、そう落ち込むなって」

「うんっ」

ボンと真琴の頭に軽く手を乗せると、ことの重大さが分かつてるのかいないのか、真琴は元気に笑ってみせた。

その後、真琴は俺と一緒に家に戻るまでの間じゅうずっと真琴は学校の話が続けていた。それだけ真琴が真剣だと言うのは間違いないのは分かる。でも、俺は俺で、そんな真琴に適当に相づちを打ちながら、どうすればいいのか思案を巡らせていた。

いきなり学校の話が出てきたのは、たぶんどこかで天野と話をしたに違いはない。実際にどんな内容だったのかはこの際置いてくとしても、天野のことを親しげに呼んでることか

『雪解け』

ら、さぞかし楽しい会話になったろうな。

そんなわけだろうから、真琴が学校について正しい認識をしてくるかどうか、まずはそれも怪しいもんだが、この際は真琴に言った通りに秋子さんに相談するのがベストだろう。どのみち、俺には手に負えない問題だからな。

そして、家に着いた俺は早速その話を秋子さんに持ちかけることにした。

本当は秋子さんが空いてる時間を見計らって話そうと思っていたけど、二階に上がろうとした時に、ふと真琴の何かをねだるような不安そうな瞳を見てしまったのだ。

「…祐一」

やれやれ……、こいつのこの瞳には勝てないよな、やつぱり…。

「分かってるって。まずは着替えてからだな」

「うん…」

秋子さんに何かを相談すること自体は、真琴だって今までなかったわけじゃないはずだ。それでも、こんな風に不安そうな表情を見せたりするのは、俺のせいなのかも知れないな。でも、もしそれが叶わなかったら…てなことを考えたら、真琴の樂觀に乗るわけにも行かないしな。

「なあに、秋子さんもちろんと真剣に考えてくれるさ」

樂觀に付き合うわけには行かないとは思いつつ、不安そうな真琴を前にしながら、気の利いた言葉の一つもかけられないようじゃオトナとは言えないさ。

そんな俺の思いを察したのかどうか、真琴は不意に笑顔を見せて、元気に答えた。

「うんっ、真琴は祐一みたいに悪いことはしてないし、頭だって悪くないんだからね」

『雪解け』

俺みたいに悪いことはしてないかどうか、それはちょっと判断に苦しむところだし、頭が本当にいいか悪いかもさっぱり分かっていない。そもそも、俺はそんなに悪いことはしてない：はずだ。まあ、この際それは置いて、真琴の不安をわざわざ煽る必要はないよな。「だったら大丈夫だな」

「あつたり前じゃないのっ、祐一が行ってる学校だもん。真琴だつて行けるわよっ」

やれやれ：本当に分かつてるのか分かってないのか、明るく言い放つ真琴に苦笑いで答えて、着替えるために俺は一旦、自分の部屋へ入った。

俺たちが一階に下りた時、秋子さんは台所にいたが、俺が声をかけるといつもと変わらない笑顔でそれに応じてくれた。

「なあに？」

「あのっ：秋子さんに：相談があるの」

言葉を詰まらせながら真琴が言うと、秋子さんは俺の方に視線を向けてきた。

「ええ、実は真琴の学校のことなんですけどね」

まるで真琴の保護者にでもなったような気分で、俺が秋子さんに本題を切り出しても、秋子さんは驚いた様子は見せなかった。

「真琴が学校行きたいって言ったの？」

と、笑顔で訊き返すだけで、この辺はさすがだなと思う。

「ええ。そう思った理由までは俺にも分からないんですけどね」

ちらっと横目に真琴を見ながら、俺は秋子さんにそう答えた。まあ、そう言ったところで、秋子さんの反応は予想できてはいるけどな。

『雪解け』

「そうね。わたしのお手伝いをしてきてるのは嬉しいけど、真琴もきちんと学校に行つた方がいいものね」

俺の予想を、そして真琴の期待をこれっぽっちも裏切ることない秋子さんの返事。と、同時に、真琴の声が上がる。

「それじゃあつ、真琴も学校行っていいんだよね！」

「ええ、早速準備しなくちゃいけないわね」

本当に嬉しそうにする真琴と、変わらない笑顔の秋子さん。それはまあ、普通の家庭の日常のひとつまなのかも知れない。だけど、真琴に限って言えば、それがそのまま当てはまりはしないのだ。

「ところで秋子さん、真琴はどここの学校に行くことになるんですか？」

すっかり現実から離れて浮かれているヤツはさておき、とりあえず俺はさしあたっての現実問題を秋子さんに確認しようとした。

「そうね。そう言えば、真琴はいくつになるのかしら？」

真琴の年齢……。そうか、そんなこともすっかり忘れていた。見た目はそりゃ普通の女の子だし、それだけを見れば中学生か高校生か……。でも、その中身はどうだろう。とりあえず、ここは真琴に確認してみることにしよう。あまりあてにはできないのは承知の上で……。

「おい、真琴。お前って今いくつなんだ？」

まだ喜び回っていた真琴に俺が訊くと、真琴は笑顔のまま簡潔に、

「知らない」

と、答えた。

『雪解け』

「つて、おい！ 『知らない』はないだろ、『知らない』はよ。いくらアホでも自分の年齢くらい覚えてるもんだぞ」

「だって、記憶喪失なんだから、しょうがないでしょっ」

「あ…そう言うことか…」

これでは「あまりあてにできない」どころではなく、「まるであてにならない」だ。まあ、確かに記憶を失つてる状態で、年齢を訊くのも無理があっただけだな。

「もう、祐一の方こそアホなんじゃないの？」

「お前に言われたくはないっ！」

と、俺は軽く真琴の頭を小突く。

「何するのよっ！ あうーっ、イタイじゃない…」

「えーい、自分の年齢も分からんくせに、学校行きたいーなんて言うヤツは黙って叩かれろ」

「あうーっ、横暴よう！ 秋子さん、助けてー！」

と言う具合に俺が真琴をおもちゃにしていると、困ったように笑いながら秋子さんが、それを制止する。

「祐一さん、真琴も真剣なんですから」

「う…」

「やーい、怒られた！」

秋子さんに俺が止められて、真琴のヤツは本当に嬉しそうに笑ってやがる。本当にそんなところはお子様だな。ま、これ以上、真琴と遊んでも話は進展しないので、ここは

『雪解け』

秋子さんとの話を進めることにしよう。

「それでですね、秋子さん。当の真琴がこんな調子だから、学校行くと言っても結構な問題があると思うんですよ」

「祐一はうるさいのよう」

はしゃぐ本人には否定的に思える俺の意見に、真琴が控えめに反論する。

しかし、そんなことを気にしてる場合じゃない。

「年齢のことだけじゃなくて、真琴が記憶喪失だってこともそうです」

「うーっ…それはしょうがないじゃない…」

「そりゃ、俺だってこいつが学校行きたいって言うなら、そうしてやりたいですけど、真琴の今の状態だと色々ともめるんじゃないかなって…」

本音として、俺は真琴にもちゃんとした生活つてのを送ってほしいと思う。もちろん、学校に行くのだって賛成だ。そうすれば、天野：「美汐ちゃん」だけじゃなくて、大勢の友だちだってできるかも知れない。

だけど、こいつの状態を思えば、こいつ自身が悪くなくても何かと人に迷惑をかけるだろうし、記憶喪失なんてハンディがあつて、楽しい学校生活になるかどうかも分からない。俺や天野、名雪にしたって、常に真琴と一緒にいるわけじゃないんだから、心配の種は尽きないと言うものだ。

「祐一さん」

秋子さんが短く言った。笑顔ではなく、どこか納得してるような表情で。

「祐一さんが心配なのは分かります。確かに真琴はハンディを負ってるのかも知れないも

『雪解け』

の。でもね…」

と、そこで言葉を一旦切り、優しい笑顔で続けた。

「真琴のハンディなんて、本当にわずかなものでしかないのよ。だから、真琴がやりた
いって思ってることをわたしたちが反対する理由はないわよね」

……俺は思わず言葉を失った。と同時に、自分の甘さを恥じた。結局のところ、秋子さ
んは俺の心配も何もかも見越して、真琴の好きにさせたいと言ってるわけで、そんな心配
もいらないうって言ってくれたんだ。

「…それじゃ、真琴も学校行っついでいいんだよね？」

俺と秋子さんの様子をうかがうようにしながら、真琴がそつと尋ねた。

「ああ」

「ええ、もちろんよ」

ほぼ同時に返る俺と秋子さんの答え。そして、今まで見たことがないんじゃないかって
くらしい真琴の最上級の嬉しそうな表情。それがすべてを物語っていた。

俺はその時、真琴のその表情と秋子さんの笑顔のおかげで、真琴に関する重大かつ致命
的な問題に気づくことなく、真琴と一緒に喜んでいた。

「よかったな、真琴」

「へっへー、これで真琴も学校行けるんだよね」

「そうは言うけどなあ、何もなしに入れるわけじゃないんだぞ。ちゃんと勉強してだ
なあ…」

「真琴はこう見えても頭いいんだからっ」

『雪解け』

「ほお？ マンガの字が読めなくて、俺に訊いてきたのは誰だっけ？」

「そんなの知らないもん……」

「頭のいいヤツはくだらないいたずらに一喜一憂しないと思うんだが？」

「あうーっ……祐一の意地悪う」

そんな風に真琴とたわいのないやり取りをしばらく続けた後、秋子さんが何気なく口にした言葉が、俺を一気に転落させた。

「さっそく真琴の戸籍抄本とか用意しなくちゃいけないわね」

そして、暗転……。

……………。

ふと気がつくと、時計は午後十一時を回っていた。

こんなに早く眠たいわけじゃなかったが、俺は部屋の明かりを消したままベッドに横たわっていた。

「ふう……」

暗い部屋の中に、ため息が一つ。そこは俺の部屋で、俺の他には誰もいないはずだから、ため息をしたのも俺に違いないけど、妙に実感がない。と言うより、あの秋子さんのひとことの後、何がどんな風になったのかなんで、さっぱり覚えちゃいない。名雪が帰ってきて、夕飯を食べて、風呂に入って……その後ずっとこうしているだけで、飯どきにどんなことを話したのかも覚えていなかった。

だいたい秋子さんもいきなりあのひとことはないだろう。真琴に戸籍なんかあるわけなのは、あの人も十分承知のはずなのに……。いや、秋子さんのことだから、真琴がいるあ

『雪解け』

の場ではそう言っただけなのかも知れないけどな。

真琴に戸籍がない理由：なんて、改めて考えることじゃないが、それは実に当たり前のことだ。真琴は元は人間じゃないんだから。

俺が昔拾った：子狐、それが真琴の正体だ。

真琴にしても、自分が記憶喪失であることを分かっているながら、戸籍とかあるののか疑問に思わないのもおめでたいところだ。まあ、今回に限って言えば、そのおめでたさに救われてる部分があるのも本当だ。

「やれやれ：どうしたものかな」

戸籍がない：なんてことを真琴に知られるわけには行かない。そんなことを知れば、あいつが自分の出生に疑問を抱くのは間違いないし、それよりなによりも、あれだけ喜んでいたのに「お前は学校に行く資格すらない」ってなことになるんだから、どれだけがっかりするか……。

駄目だ。どんなことになっても、真琴を悲しませるようなことは絶対にしちゃ駄目なんだ。

…とまあ、気持ちが先んじるばかりで、俺の頭にはうまい方法とやらが一向に浮かんでこない。やれやれ、こんな時に頼りになりそうな相談相手と言ってもなあ：名雪は論外だし、天野にしても今すぐってわけには行かないし：、ここはやっぱり一度秋子さんに確認するしかないか…。

それからしばらく悩んだ後、俺は他の二人には気取られないように（と言っても名雪はまず心配ないが）静かに一階へと下りていった。

『雪解け』

時間が時間だけに秋子さんは自分の部屋かも知れないと思っていたら、台所で何かをやっているようだった。

「秋子さん、まだやってるんですか？」

驚かさないように控えめに俺が声をかけると、秋子さんはふと手を止めて俺の方に答えてくれた。

「あら、祐一さんどうしたの？」

「まだ寝るには早いですから…」

本来の目的そのままではなく、ややはっきりとしない調子で告げた俺に対して、秋子さんはすべてお見通しと言わんばかりの笑顔で、

「そうね、わたしの方ももう終わりだし、お茶でも入れますね」

と、答えた。やっぱり秋子さんにはかなわないな…。

しばらく後に俺は秋子さんと食卓で向かい合うように座った。お互いの前には湯飲み茶碗があるが、その中身は日本茶ではなく、よく分からないがノンカフェインの中国茶らしい。

「眠れなくなるといけないから」

そう言うとき秋子さんは自分の湯飲みを口を当てる。それに合わせて俺も一口飲んでみる…：うん、不味くはない…。ととつ、こんな風にのんびりとお茶を味わってる場合じゃないんだ。

「秋子さん…：ちょっと、話していいですか？」

程良い温かさの湯飲みをつかみながら、俺が意を決して切り出すと、

『雪解け』

「真琴のことね？」

秋子さんはズバリ読みとってくれた。

「ど、どうして、真琴のことって分かったんです？」

「真琴と話をしてからずっと…祐一さんの様子が少し変だなと思ってたのよ。真琴に対しては自分も嬉しそうに返していたのに、名雪やわたしの声にはあまり反応をしてくれなかったから」

「あれは……」

秋子さんがいきなり核心をつくから悪いんです…とは言えず、思わず俺が言葉を濁していると、秋子さんが話し始めた。

「祐一さんは本当に真琴のことが心配でたまらないのね。確かに真琴は放っておけないところはあるけど、そんな風にあまり心配しすぎるのもあの子にとってよくないと思うの」

「心配って…別にそんなわけじゃあ…」

「あの子が自分で学校に行きたいって言い出したんだから、きつかけはどうあれ、あの子の好きにさせたいと思うでしょ？」

「ええ…そりやそうです」

「だったら、祐一さんもそんなに心配することはないと思うわ」

「い、いえ、違うんですよ。俺が心配してるのはそんなことじゃなくて…」

諭すような（と言うか、そのまんまなのだが）秋子さんの優しい口調にもめげず、俺がなおも抵抗を試みると秋子さんはわずかに怪訝そうにしていた。

「他に気になることがあるの？」

『雪解け』

「真琴の…戸籍って……」

「それがどうかしたの？」

「いや…だから…真琴の戸籍って取れるんですか？」

何となくストレートには言いづらく、俺はやたらと遠回しな表現で秋子さんに訊き返した。

「真琴が記憶喪失なのに、戸籍なんて取れるのかと訊きたいのね？」

「ええ」

まるきりそのまま言うわけじゃないものの、その戸籍のことが気になってるのは本当だ。

「祐一さんの心配ももっともだと思うけど、大丈夫よ。だって、真琴はこの家族なんですから」

「そんないーかげんでいいんですか？」

「いいも何も真琴本人は記憶喪失状態だし、あの子が帰る場所は…ここであって欲しいじゃない？」

ほんの一瞬だけ言葉を詰まらせたように感じたのは、たぶん気のせいじゃなかっただろう。真琴と別れた日の朝の…あの時の秋子さんと真琴のことを思えば、秋子さんの言いたいことは俺にもよく分かる。

「でも、真琴はそもそも……」

と、俺が一番肝心なことを口に出そうとした時だ。不意に食堂の方に誰かがやってくる気配を感じたのだった。

『雪解け』

「あれ？ 秋子さんに…祐…何してるの…」

それはカエルのプリント柄のパジャマ（以前と同じ物ではないが、似たような物を名雪が持っていたのだ。同じようなのを持つてる名雪もだが、それを喜んで着ている真琴も実に進歩がない）を着た真琴だった。

「お前、何してんだよっ！」

とつさに俺は真琴に向かって叫んでしまった。

「わあっ！ ト、トイレに起きたら、台所の明かりがついてたから、何かなあって思ってた見に来ただけようっ」

「そうか…」

それまでの秋子さんとの話を聞かれてはいないか気になったのだが、よく考えてみればまだ一番肝心なことを言う前だった。真琴にしてみれば、いわれのないことで怒られてるようなもんだな…と、そこでようやく俺は落ち着くことができた。

真琴の方はまだ寝ぼけ気味のように、俺がいきなり怒ってるようにしている理由も何も分かってる様子はない。もし、聞いていたら真琴だってこんな風にのんきに構えてはいないだろうけどな。

やれやれ、人騒がせな…と俺が軽いため息混じりに椅子に座り直すと、今度は秋子さんが席を立った。

「真琴もお茶を飲む？」

「うんっ」

少し元気を取り戻したのか、真琴は嬉しそうに短く答えると俺の隣に座る。

『雪解け』

「トイレ行って来たばかりなのに、また夜中に起きるぞ」

「夜の方は今したばっかりだから平気よっ」

「今したばかりよっって、お前：もうちょっと言い方を考えた方がいいぞ」

「だって本当じゃないの」

「そんなことを言ってるんじゃないよ……」

……こんな調子じゃ、真琴が高校生になると言っても誰も信じてくれないだろうな……と、ふと思ったりしたが、俺はそれ以上言うのをやめた。

「はい、これ飲んだら、すぐに寝るのよ」

「うん」

俺の横で、秋子さんから湯飲みを受け取って、嬉しそうにそれを口へと運ぶ真琴。こんな些細なことでも、これだけ感情一杯に嬉しそうにするヤツなんてそう多くはないぞ。からかうと面白いと言う点でも、あゆに負けず劣らずだ。

「何よう……」

嬉しそうに湯飲みを空けようとしている真琴が、俺の視線に反応して少しぼつが悪そうにしている。

「いや、一杯のお茶を本当に幸せそうに飲むなあと……」

「秋子さんのお茶、おいしーんだから当たり前じゃないの」

「そりゃよかったな」

「あうーっ、また真琴のこと馬鹿にしてるでしょ！」

「いや、そんなことはないぞ」

『雪解け』

「本当？」

「ああ」

短く答えながら、俺は真琴の頭にそっと手を置いた。すると、真琴はその俺の行動に戸惑いを感じたのか、控えめに俺に訊いてくるのだった。

「……祐一ちよつとヘンだけど、何かあったの？」

「へえ、心配してくれるのか？」

「ば、馬鹿っ、そんなじゃないわよっ！」

慌てるように俺の手を振り払い、ぶんぶんっと音がするくらい派手に頭を横に振った後、真琴は勢いよく立ち上がった。そしてそのまま二階へと上がっていき、俺は俺で秋子さんともそれ以上話すことなく、その場はお開きになってしまった。

結局のところ、俺の悩みは一向に解決の兆しがないままだ。秋子さんがこの重大さを認識して見るようには見えないけど、天下無敵のマイペース秋子さんと言っても、出来ることと出来ないことがあるはずだ。

まあ確かに俺がこうして悩んでいても、事態に進展があるとは言えないのは分かっている。しかし、真琴の気持ちを思うと、何もせずにはいられないのが本音だけに、悩みほどまることはないわけだ。

……もし、真琴の望みが叶わなかったとしたら。それが、真琴自身の問題でないことによるのだとしたら……いくら真琴がおめでたいヤツでも、出自に疑問と不安を感じるだろうな。その時になって果たして俺はその不安を拭うことができるのか……それも分からない。

……………。

『雪解け』

……やめやめ。

これ以上考えても、名案なんて一つも出てきやしねえし、とりあえずは明日学校で天野と少し話してみるか…。

真琴が学校に通うのは現実的に不可能だとしても、せめて学校がどんな場所なのかぐらい教えてやるのもいいだろうし、それには天野の協力が必要だしな。

こうしていつもとさほど変わらぬ時間帯に寝入った後、悩みと眠気は別物と言わんばかりに朝までぐっすりと眠り込んでしまった。何となく水瀬家の家風に染まっているような気がしないでもないが、この際それは深く考えないでおこう。

翌朝。

真琴は珍しく早起きして、秋子さんの手伝いなんかをしていたが、要するに嬉しくてじっとしてられないってのが本音だろう。ま、そりやそれでいいんだけどな。

秋子さんが真琴の戸籍のことをどうしようと考えているのか、それも気にはなるが、ひとまず俺は俺でやることをやっておくだけしかないんだ。

そんなわけで、早速その日の昼休みに天野に話をするために、俺は中庭へと向かった。

もう少し暖かくなると昼休みの中庭は人気の場所になるらしいが、まだ人の姿は少なく、天野がいそうな気がしたのだ。そして、中庭への通路に出ると、俺はすぐに目的の人物の背中を見つけることができた。

「よお、ちょっといいかな？」

階段に腰を下ろして、小さなランチボックスを自分の足のの上に乗せている女の子…天野の背中に声をかけると、別段驚いた様子もなく彼女が振り向く。

『雪解け』

「ええ、かまわないですよ、相沢さん」

俺が来ることを予測でもしていたかのように、さらっと出てくる言葉。どうやら食事はほぼ終わったところらしかつた。

食べ物を含ませて、慌ててそれをどうにかしようとする姿…なんてのを期待していただだけに残念…と、残念がついてもしようがないので、まずは何気ない話から始めるとするか…。

「いやな、真琴のヤツがお前のことを『美汐ちゃん』とか呼んでいたけど、何かあったのかってな」

俺がそう言うと、天野はかすかに笑ってみせる。

「大したことじゃありません。先日、学校の帰りに真琴と商店街で会って、あの子が食べたいって言うから肉まんを買ってあげたんです」

「それだけなのか？」

「それが全部だとは言い切れませんが、それから態度が変わったのは事実ですね」

やれやれ、いくら相手が天野だからと言って、それくらいのことでは態度を変えるなんて…いかに真琴らしいか、確かに。

「知らないオッサンに『お嬢ちゃんに肉まん買ってあげるからついておいで』とか言われて、ついて行ったりしないだろうな」

「大丈夫ですよ、あの子は知らない人は警戒しますからね」

「そりゃ、二歳三歳の子供じゃないんだからなあ…」

「それにしても、本当に相沢さんは真琴のことになると心配性ですね。横から見ても

『雪解け』

ちよつとおかしいくらいですよ」

おかしいくらいですよ…なんて言っておきながら、天野は笑っちゃいない。

「なら、笑え」

「それとこれとは別です」

俺の短い言葉に合わせるような天野の短い返事。いや、まあ、別に無理に笑えってんじゃないから、それはそれでいいんだ。そもそも本題はまったく別の話なんだから。

「そりゃ残念…つと、その真琴の話ついでお前に頼みがあるんだけどな」

「はい」

「お前の制服、ちよつと貸してくれないか？」

俺がそう言った瞬間、天野は珍しくと言うべきか、とにかく思いつき怪訝そうな表情をしてみせた。手を胸の前で軽く組んだりして…明らかに警戒してるのが分かる。

「…：相沢さん？」

その表情と言葉の調子から、天野が俺の言ってることを完全に誤解してるのは疑いようがない。

「ちよつと誤解してないか、お前…。俺がどうこうするんじゃない、真琴に一度着せたいただけだ」

誤解を解くべく簡単に説明を補足したが、それでもまだ天野の表情は固く、手も組まれたままだ。

「それはそれで変ですよ…」

天野がまだ大変な誤解をしていることがよく分かる。それにしても、俺が真琴に制服着せ

て、どうすると思っただよ……。

「まだ誤解してるな、お前。俺は別に真琴に制服着せて楽しもうって言う魂胆じゃなくて、あいつに学校生活がどんなものかってのをちょっと体験させてやりたいだけなんだよ」

「ああ、そう言うことですか…」

そこでようやく天野の表情から、怪訝な色が消える。こいつは俺のことをどう思ってるんだろうか…。

「分かってくれたか？」

苦笑い混じりに俺が確認をすると、今度は真面目な表情を見せた。

「はい。でも、どうして急に？」

「ま、急にあいつが学校行きたいなんて言い出してね」

「ここにですか？」

いくら明るいやつとは言っても、真琴はあれで人見知りがすごい。まともに話せる相手なんて、それほど片手で足りるくらいしかないのだから、学校に行きたいと言う本当の理由は実に単純なものだろう。

要するに俺や天野と一緒にいたい…それだけなんだ。だいいち、あいつが自分で「勉強したいっ」なんて言うはずがないし、そんなことはこれまで一度も聞いたことがない。

「他にないだろう？ 俺や…『美汐ちゃん』がいるところは」

「その呼び方…やめてくれませんか」

真琴を真似て「美汐ちゃん」と呼ぶと、天野は少しだけばつが悪そうにしていた。見よ
うによっては、照れてるようにも思えるけどな。

「はは、悪い」

「でも、それなら普通にここに入ってくればいいことじゃないですか？ 相沢さんがそこまでする理由が分かりませんけど……」

笑う俺に対して、天野はいつもとさほど変わらない調子で訊き返した。決して冗談で言ってる様子はないし、仮にそうだったとしても天野の冗談は今ひとつ笑えるものじゃない。

「何だ……お前も秋子さんと同じかよ……。いいか？ 真琴がどれだけ入りたいと思っても、それだけの学力があったとしても、あいつには肝心な物が欠けてるし、そればかりは本人の努力とか周囲の協力とかで解決できるもんじゃないんだ」

「それは何ですか？」

「人としての『沢渡真琴』の存在を証明する物……平たく言えば戸籍とかな」

「あ……そう言うことですか」

小さくうなづく天野。が、どうもその言葉には緊迫感が含まれていない。

「こればかりはねつ造するわけにもいかないだろ？」

「そうですけど……でも、そんなに心配しなくても、どうにかなるんじゃないかって気がしますね、わたしには」

話せば話すほど深刻さを増していく俺とは対照的に、天野の言葉には本当に深刻さがなかった。

「何だよ、それは」

天野の態度に疑問……と言うよりは、かすかに怒りのようなものを感じつつ、俺が短く訊

『雪解け』

き返すと、天野は困ったような表情を浮かべた。

「よく分かりませんが…相沢さんの心配は…」

「取り越し苦労だって言うのか？」

少しだけ俺の声が大きくなる。

「いえ、そこまでは…ただ、ちょっと思い詰めすぎじゃないかと…」

それでも、天野はなおも俺の意見を肯定せずに、伏し目がちにつぶやくようにそう言った。その瞬間、俺は自分の中にわいていた天野に対する怒りが、理不尽なものでしかないと悟った。そりゃ、そうだよな…。今ここで俺が天野に対して怒る理由なんて、何にもありやしないんだから。

「天野にそう言われるとは…正直、意外だったよ…」

「すみません」

律儀に謝る天野に向かって俺は小さく笑い、今日の主題へと話を戻す。

「謝ることじゃないって。で、真琴の高校生体験（ここで誤った変換をすると、とんでもないことになるのだが）には協力してくれるのか？」

「…：はい」

小さくうなづく天野だったが、その表情は少しだけ納得していないような感じがした。

「何か不満そうだな」

「不満ではないです。相沢さんは真琴のことになると、本当になりふり構わずだと思っただけですから」

「悪かったな」

『雪解け』

「悪くなんてないですよ。ただ………いえ、何でもありません」

ただ……と言う言葉の後、天野は何かを口の中でつぶやいたようだったけど、その部分には聞き取れなかった。

「よく聞き取れなかったけど……何を言いたかったんだ？」

「……いいんです。それで、あの子のことですけど、いつにしますか？」

「ん？ そうだな……明日は土曜だし、お前がよければ明日にでも」

「わたしの方は別にかまいません。では、明日と言うことにしますが、着替えはどこでしますか？」

「俺が真琴の部屋でもいいけど、天野を余計につれ回すのも悪いな……」

着替えも学校でできれば一番楽だけど、それは無理だろうし、天野に家まで来てもらわないと、俺じゃあ真琴の制服の身支度なんてできないし……。

「わたしの部屋でもかまいませんけど……」

一瞬俺は自分の耳を疑ったが、天野がせっかくそう言うってくれるのを断る理由はない。ただ、本当にそれは意外な提案だったのだ。

「天野の？ え？ 本当にいいのか？」

「ええ。替えの制服を出して持つて行くのも何ですから」

俺が念入りに訊き返しても、天野は平然とそれに答えるだけで、動揺してるようなこともない。その平静さに俺も安心して、俺は天野の提案に甘えることにした。

「そうか。それじゃ俺は一旦帰ってから真琴と一緒に出直すようにすればいいかな？」

「そうですね」

『雪解け』

「じゃあ、駅前に二時でいいか？」

「駅前に二時ですね、分かりました」

「色々と頼んじゃって悪いな。こんなことを相談できるのも、こんな頼みごとをできるのも天野しかないからさ、俺には」

「相沢さん……」

困ったような笑顔を浮かべる天野。

その表情からは天野が何を思っているのかよく分からない。少し気になったものの、夕イミングを計っていたかのごとく、そこで予鈴が鳴ってしまった。

「おっと、もうこんな時間か……。それじゃ、明日よろしくな！」

俺の言葉に天野も小さくうなずいたのを確認してから、俺はその場を後にした。

実を言うと、天野に頼んだことを真琴にはまだ何一つとして話していない。と言うのも、天野の協力が得られるかどうか分からない状態では真琴に強く言えないし、ことが決まってしまうえば真琴を説得するのはそんなに難しくはないと思ったからだ。

そんなわけだから、帰るとすぐに俺は真琴にその話を切りだした。

「おい、真琴。お前はヒマ人だから、明日の午後は当然空いてるよな？」

「いきなり何よう……。別にヒマってわけじゃないんだからあ」

どうせ俺がどう切り出したところで、真琴がそれに素直に乗ってくるはずがないのは分かっていた。だから、ここは遠回しに真琴が興味を持つように話を進めなくてはならないのだ。

「お、忙しいのか？ そっか……。それじゃ、せっかく天野が手伝ってくれてるってのにな……」

『雪解け』

いや、俺は別にそれでも構わないけどなあ」

少しだけわざとらしい言い方だが、それはこの際しようがない。コレくらいはストレートにしておかないと、真琴のやつも乗ってこないかも知れないからな。

「え……美汐ちゃん？」

さすがにその名前は真琴にとっても、かなりの吸引力を持っているらしく、途端に不安そうな表情を見せてつぶやくように答えた。俺としては、それこそ狙い通りなのだが、これも簡単だと逆に物足りないぞ。

「こそ。その美汐ちゃんの誘いって言ってもおかしくはないんだけどな？」

「うーっ……」

さらなる俺の攻撃に、真琴は困ったようにうなる。いや、別に本当にうなってるわけじゃないが、かなり迷ってるようだ。

「でも、真琴は忙しいんだろ？」

「うっ……うん……」

そこまで悩んでいながらも、俺の前では素直に言わないところもまた真琴らしいのだが、それを分かっているながら言う俺も俺だ。まあ、ここで真琴を追いつめても俺としては不本意なのだから、次の段階へと移るとしよう。

「でも、お前の方の用事は、何とか午前中に片づかないか？」

ここで「忙しいなんてウソだろ？」とか言ってしまうようでは、まだまだ修行が足りない。とにかくここは真琴の逃げ道をちゃんと作って、俺の望む方に誘導しなくてはいけないのだ。

『雪解け』

「う……ん……」

ためらいながらくくりとうなづく真琴。ふっ……落ちたな。

「それじゃあ、悪いけどそっちは午前中に片づけてくれよ。天野の約束は午後二時に駅前だからな」

「祐一は？」

「俺も一緒だけど、イヤなのか？」

「ううん、そんなことないけど……何するの？」

「それは明日話す」

「何それ？もしかして、真琴に何かしようとかくらんてる？」

さすがに鋭い……。しかし、まあ、ここで余計な詮索をされるのはちょっと不意だな。

「俺だけならともかく、天野がお前をだますと思うか？」

「それもそうよね。美汐ちゃんは祐一とは違って優しいもん」

正面切ってそんな風に肯定されると、先に言ったのが自分だとしても少し気分がよくない。まして満面の笑みとともに……なんて、実に気に入くないぞ。

「悪かったな」

あからさまに不機嫌の色を含ませた返事をしたが、真琴もそれに負けてはいなかった。

「そこで謝るくらいなら、普段から優しくしてくれればいいじゃないっ」

「バカ言え。俺がお前に敵しいのは、言わば愛のムチなんだぞ」

「そんなのいらぬもん……」

「ま、そんなことはともかくとして、明日の午後は空けておいてくれよな」

『雪解け』

これ以上真琴と意味のないやり取りをしてもしょうがないので、俺がそこでまよめの言葉を出すと、真琴は少しだけ釈然としない表情をしながら答えた。

「うん」

こうして、俺は真琴の部屋から出て行こうとしたが、ふとそこで真琴の戸籍とかを用意しに行つたはずの秋子さんのことが気になった。

「…そう言えば、秋子さんは？」

「お仕事って言って、出かけてる」

「そうか…」

すると、帰りにでも時間があつたら寄つて行くつもりかも知れないな…。とは言つても、秋子さんが実際にどうするのかなんてことは、俺には想像できないけどな。

いくら秋子さんと言つても、戸籍とか住民票とかをねつ造することはできないもんな…。と、俺は少なからず気にしていたのだが、その日秋子さんは忙しくて真琴の用件を果たすことができなかつたと言ふことだった。

それはそれでひとまずよかつたのだが、明日には必ず行くから（土曜開庁してる役所なんて珍しいと思うが、何でも「市民サービスの充実」を公約にしている市民課の窓口だけはやってるらしい）と言つていた秋子さんと、それに答える真琴の笑顔が少しだけ痛かつた。

明けて土曜日。

その日は見事なまでにいい天気だった。放射冷却のおかげか朝方は少し寒さを感じるものの、それもすぐに春の陽気へと変わることは間違いない。

『雪解け』

「真琴に今日の約束のことを忘れないようにと、念を押して俺は名雪と学校に向かう。が、学校へと走ってる中、名雪がふと俺に訊いてきた。

「ねえ、真琴との約束って何？」

「何でもねえよ」

素っ気なく俺が答えると、名雪は少し不満そうに俺に向かって小さくつぶやいた。

「わたしだけ仲間はずれ…」

名雪の言いたいことは分からないわけじゃない。でも、今回のことは特に名雪には関係がないのは本当のことだ。

「別にそんなんじゃないし、お前には関係ないからな」

「うゝ…祐一、最近冷たいよ」

今も昔も、俺は名雪に対してこんな感じだったと思う。

「昔っからだ」

「そんなことないよ。前はもつと優しくかったもん…」

優しくかったもん…って…名雪は俺のどの辺を見て、そう言ってるんだかよく分からない。もつとも、そんな風に言われてしまっっては、これ以上冷たくあしらうのも気が引ける。

「…そんじゃ、そのうちお前にも付き合っってやるよ」

俺がそう言った途端に名雪の表情が明るくなった。単純と言えは単純だ。

「ホント？ それじゃ百花屋でイチゴサンデーだね」

「何でそうなる？」

「いいじゃない」

『雪解け』

名雪に百花屋とくれば、それしかないことは分かる。だが、ここで言いたいの……俺と名雪が百花屋に行くと言うことは、十中八九俺がおこる羽目になると言うことだ。

「ワリカンな」

名雪におおると言う話が出る前に、俺は短くはつきりと言った。だが、名雪の方は特に変化もなく、実に嬉しそうに笑って答えるだけだ。

「うん、それでいいよ」

その名雪の笑顔を見て、俺は「しまった！」と思った。よく考えてみれば、ワリカンだろうがおごりだろうが、結局は損をするのは俺の方なのだ。何故なら、百花屋で俺が名雪以上に食べることはほとんどないから。

しかしまあ、たったこれだけのことで嬉しそうにする名雪を見ると、たまには名雪に付き合うのもいいか……なんて、思えてしまうから不思議だ。

「いつ行こうか？」

「お前が忙しくない時でいいぞ……っと、今日はダメだけどな」

「うん、そうだね」

うなずきながら笑顔で答える名雪。その様子からは、さっきまで真琴のことを気にしていたとは思えないくらいだった。いや、本当に気にしてないに違いない。何せ、こいつも結構単純なやつだからな。それにしても、何で俺の周りにはこんな風におめでたいやつばかりなんだ？

そうして名雪とも約束を交わした俺は、その後もたわいのない会話を続けながら学校へと走り続けた。

『雪解け』

半日の授業が終わり、名雪は部活へ（もちろんその前に学食でいつものやつを食べて行くらしいが）俺は天野と真琴の約束のために、学校を後にした。

昇降口や校門で天野と会うことはなかったが、今日の約束を天野が忘れるはずがないし、遅れるようなことがあっては悪いので、俺も取り急ぎ家へと向かう。

ふと空を見上げると、澄み切った青空が広がっていて、陽気も心地いい加減だった。そう言えばこの前、天野と真琴と一緒にいた時もこんな感じだった。

あれから…と言うか、真琴が戻ってきてから、まだほんの数日しか経ってないんだな、と改めて実感してしまう。あの時に聞いた約束は確かに本当だったはずで、だからこそ真琴はそこにいた。だけど、たわいのない日常がいつまでも続くかどうかと言うことは保証されていない。

だから俺は……。

だから俺は？

何だろう……この自分の中に感じているはっきりしない重たいものは…。

それは天野や秋子さん、そして真琴にも感じられなくて、俺だけが感じている暗くて重たいもの…。

「ええいっ！ 今さらウジウジしてもしょうがねえぞ！」

ふと自分の中にわき起こった感覚に対して、俺はそれを否定するように自分を叱咤し、そのまま勢いよく走り始めた。そのまま普通に歩いていたら、また余計なことを考え込んでしまいそうだったから。

俺が家に帰ると、真琴は珍しく俺を出迎えてくれた。

『雪解け』

「あつ……祐一……」

正確に言うとはそれは出迎えと言うより、ずっと待つことが我慢できずに外に行こうとしたらしいことは、真琴の様子から分かった。

「何だ、これから出かけるのか？」

「遅いっ！」

俺を見て驚いた後に、真琴はすぐ怒った顔を見せた。どうやら、真琴にとつてはかなりの時間待たされたらしい。

「これでも急いで来たんだ、そう怒るなって。それに約束は駅前に二時だから、これから昼飯食って出ても十分間に合うさ」

「もーっ、祐一はこれだからダメなのよっ」

帰ってくるなりダメだしされてしまつては俺の立場はない。とは言え、ここで真琴と口げんかをやっているヒマも本当にないはずだ。

「分かった分かった。とにかく、ここで言い合つてもしょうがないだろう？」

そう言いながら俺は真琴の体を押すようにして、自分も靴を脱いだ。

「うーっ！ 押さないでよう」

「とつと戻れって」

「だから、押さないでって言ってるじゃないっ」

「口よりも足を動かせ」

その後も真琴はわずかに抵抗を見せてはいたものの、この場合では俺の言ってることの方が正しいと認めているのか、家の中へと戻っていった。

『雪解け』

それからもやいのやいのと口やかましかったが、一つ一つに真剣に答えるヒマはないので、俺もとっとと昼飯を食べて身支度を整えた。

「ところで、美汐ちゃんとの約束って何をするの？」

「そりゃ後になれば分かる」

「昨日もそう言って、教えてくれなかったじゃない」

「変なことはしないから安心しろって」

「変なことって？」

きよとんした表情で真琴が訊き返してきたが、よくよく考えてみれば俺も説明に困ってしまう質問だった。

「そりゃあ…変なことだ」

具体的に説明なんかした日には、真琴が目一杯警戒する（変なことの具体例はそれぞれの妄想に一任するとして）に決まっている。もともと、真琴がそうした貞操観念があるのかないのか…ちよつと俺には分からないのだけど。

「あうーっ、何なのよう」

「お前に分からないようなことはしないから安心しろ」

「それじゃあさっぱり分からないわよう…」

「じゃ、訊くな」

「あうーっ……」

そこで真琴は一応は納得したのか、あるいは観念したのか、それ以上の質問を続けることはなく、俺の後ろを黙って歩いていった。心持ち不安そうな表情ではあるものの、こんな

『雪解け』

風に素直な真琴も珍しい。

こうして俺たちが天野と約束していた場所に着いたのは、約束の二時の少し前だった。

「二時には間に合ったな」

駅前にある時計を見て俺がそう言うと、真琴も安心したように言う。

「祐一が帰ってくるの遅いから心配しちゃったけど、間に合ってたあ」

その言いぶりからすると、まるで俺が遅刻したみたいな感じだが、俺だって自分なりに時間の配分はしていたのだ。

「こうしてちゃんと間に合ったじゃないか」

だが、真琴はそれで納得してくれず、不満顔で俺に反論してみせる。

「うーっ、約束の時間を決めたのは祐一なんだから、もっと早くに来てもバチは当たらないわよっ」

「あんまり細かいこと気にしてると、禿げるぞ」

「うーっ……」

そのままダーっと罵詈雑言が続くような勢いだったが、俺のひとことで真琴は複雑な表情を見せて言葉を詰まらせてしまった。普段は小うるさいくせに、こんな風なひとことを信じ込んで黙ってしまうのも、なかなか可愛いと言えるだろう。誰かが余計な入れ知恵さえしなれば、当分はこのひとことで真琴の攻撃はかわせそうだ。

と、その時、俺の背後から声がかげられた。

「相沢さん……」

この場で俺をそんな風に呼ぶのは一人しかない。

『雪解け』

「よお、天野。待ったか？」

くるりと向きを変えながら俺が呼びかけると、天野は笑ってるんだか困ってるんだかよく分からない複雑な表情をしていた。

「相変わらず仲がいいですね」

その時の天野の言葉に嫌みや含みがあるわけではないのに、どこか堅さが感じられた。いつもと変わらないはずなのに、決定的な何かが違うなんて、よく分からない表現をしようが、真琴もそれを感じているらしく、いつもの調子で接することはできないようだ。「あーっ、祐一となんて、仲がいいはずないもん…」

先ほどまで盛んに「美汐ちゃん」と呼んでいた割には、反論も偉く控えめなもので、心なしか緊張しているようにも見える。

しかし、その真琴の言葉を境に、天野の雰囲気は何となく和らいだような気がした。「そうね」

と短い言葉で真琴の反論にうなずきながら、かすかな笑みを真琴に返す天野の姿は、間違いない俺と真琴の知ってる天野だ。

そこでようやく俺も真琴もいつもの調子で言葉が出るようになった。

「二時ちょうどは、やっぱり天野らしいな」

「ねえねえ美汐ちゃん！ 祐一が遅れそうだったんだよ」

「俺ばっかり悪者にするつもりか？」

「だって本当のことじゃないっ」

「真琴も相沢さんも…ここで騒ぐと目立ちますよ」

『雪解け』

「うっ…」

「またも真琴と口げんかになりそうなところを、天野に止められた…。さっきと言い、天野にあしらわれているような気がしないでもない。もっとも、今のは天野もどこか楽しげな感じがして、さっきとはずいぶん印象が違う。」

「別に遅れたわけじゃないから、どっちも責める理由はないですよ」

口調こそいつもと変わらないが、何となく楽しそうな印象があるのだ。

それはまるで……秋子さんのあの無敵の笑顔を見るようで、そんな表情の天野を前にしては、真琴もおとなしくなるしかないらしく、

「あうーっ…」

上目遣いで天野と俺を交互に見ながら、ばつが悪そうにそれ以上言葉を続けることはない。

「それじゃ行きましょうか」

真琴が静かになったのを待ってたように天野が言った。

珍しく先頭をとる形になったが、そもそもここからは天野に案内してもらい必要があるのだから、それに逆らう理由はない。

「そうだな。確か天野ん家は遠いんだよな？」

「ええ……美汐ちゃん家ってここから遠いの？」

俺の横で真琴が情けない声を上げると、天野はかすかに笑いながらそれに答える。

「遠いと言っても、歩いて十五分くらいだから…ね？」

「うん……」

その天野の仕草はまるで子供をあやすような優しい感じだった。さすがと言うか、妙に真琴のツボを心得ていると言うか……。現に真琴はそれ以上文句を言うのをやめちまつたし、とても俺にはそんな真似はできそうにない。

その時俺はふと「真琴も現金なやつだな」と言いたくなつたが、やっぱりやめておいた。ここで俺がまた何かを言っても、あまりいい結果を生みそうにないと確信してしまつたのだ。せつかく真琴がおとなしく従つてるんだから、わざわざ騒ぐタネを作ることはないに決まつてる。

天野も真琴もちらつと俺の方を気にするように見たものの、俺が何も言わなかつたので、また歩き始めた。

そして、天野が言つたよりも少し長い時間……二十分くらい歩き続けた後、天野の足が一軒の家の前で止まる。秋子さんの家ほどは大きくないが、おおよそ普通の二階建ての家だ……と言うか、水瀬家が特別に大きいんだよ。少ない人数に大きな家と言うのは、家運が良くないと聞いたことがあるような気がするけど、この際それはどうでもいいか。

「ここです」

「明るい感じの綺麗な家だな。天野の家族も家と一緒に明るいんだろな」

短く告げた天野の言葉に続いて、俺はごく簡単に家の感想を述べた。

社交辞令と思われるかも知れないが、ぱつと見た感じでは確かに明るい感じがしたのだ。ただ、後半部分は余計だったかも知れないと、言つた後で思う。

「……そうですね、わたし以外はみんな明るいかも知れませぬ」

わずかに視線を落とし、薄く笑いながら答える天野。

『雪解け』

やれやれ：我ながらつまらないことを言ったもんだな。

「そんなことないって。お前だって、な…」

と、少々臭さを感じつつも俺が天野に向かって言うと、天野はそれに答えるように笑ってみせるものの、その笑顔はどこかきこちなさがあった。

「とにかく上がってください」

これ以上その話を続けたくはないと言う意思表示もあったのか、天野は俺と真琴を誘導するように門をくぐって、中へと入っていった。

確かに家の外でこんな話をしてもしようがない。俺はそう思って、真琴を前に押し出すようにしながら天野の後に続いたが、真琴は真琴で天野の家の様子を物珍しそうにきよろきよろと眺めている。そんな状態なので、当然真琴は自分の足元には全然注意を払っておらず、かなり危なっかしい……。

「ちゃんと前見てないと…」

転ぶぞ……と俺が言おうとした瞬間、真琴は玄関へと続く段差でつまづいていた。この馬鹿たれが…。

「わあっ！」

叫び声とともに真琴は慌てて足を踏ん張ったが…そのまま前を歩いていた天野の背中に顔をぶつけてしまう。と、同時に天野も真琴に押された勢いで…まだ開いていない玄関の扉にゴツンと……。

「あっあうーっ……」

「……………」

『雪解け』

涙目で鼻を押さえる真琴と、呆れたような表情で額に手を当てている天野。これはなかなか見ることのできない光景かも知れないと、俺がその光景を忘れないように（苦笑いをおさえながら）眺めていると、不意に玄關の扉が開いて、小柄な女性が姿を見せた。たぶん、天野の母さんだろう。

「なあに、今の音？」

驚いたような表情を見せながら、小柄な女性は天野と真琴と俺とを一通り見回した後、不意に明るい声で笑い出した。

「やだっ、美汐ったら、お友だち連れてきたならそう言ってくれないとっ。ほら、そんなところでおでこを押さえる場合じゃないでしょ？」

…それはメチャ明るい声で、俺はただその勢いに圧倒されるばかりだった。

「お母さん……」

そこでようやく天野が言葉を返して、俺の予想は間違っていないことが分かったのだが、「ほらほら、余計なことは言わなくていいから、早く上がってもらいなさい」

と、相変わらず天野と母さんの態度は見事に対照的で、にわかには信じられないくらいだ。

「はい…。それじゃあ…相沢さん、真琴……」

天野の母さんの勢いにかき消されてしまいそうな感じの、天野の声だった。しかしまあ、俺がそこで変な遠慮なんかしたらかえって悪いに決まってる。

「じゃあ、お邪魔します」

まだ鼻を押さえていた真琴の手を引っ張りながら、俺はそう言って天野の母さんに軽く

『雪解け』

べこりと頭を下げて、家へと上がった。真琴は俺に引つ張られながら、俺と同じように挨拶：なんてするはずもなく、

「あうっ……」

と言っただけだった。それでも、天野の母さんは一向に動じる様子がなく、にこやかに応対してくれる。

「どうぞどうぞ」

：何と言うか、ますます天野と親子とは思えないほどだ。

その後、俺たちは天野の部屋に案内されたのだが、部屋に俺たち三人を残して天野の母さんが姿を消すと、

「明るい母だ……って思ってるでしょう？」

と、天野が困ったような表情で言った。すっかり見透かされているようなので、俺はそれを素直に認めることにする。

「まあ……ね。一緒にいて飽きない感じがする人だよな」

一応は当たり障りのない答えをしたつもりだったし、それで問題はないと思っていた。しかし、天野は視線をすっと落とすと、苦い表情を見せた。

「元々明るい人なんですけど、わたしがふさぎ込んでからは……前にも増して明るくなくなりました」

天野がふさぎ込んだ時……って言うのは、あれだ。ものみの丘の狐と……二度目の別れをした時のことで、それは俺にはよく分かる。天野が俺の気持ちを分かってくれたように。

が、それは真琴には分からない……いや、絶対に分かって欲しくないことでもある。

『雪解け』

「美汐ちゃん…何かツライことでもあったの？」

何気なく天野に向けられた質問。それは真琴にしてみれば、本当に天野のことが気になってと言う純粋なものだと思う。だけど、それは純粋さと同時に無知ゆえの残酷さも持っていた。

「…昔のことだけど、今はもう平気だから」

「そう？ よかったあ」

一瞬だけ言葉を詰まらせて天野が短く答えると、真琴は安心したように笑ってみせる。それは、人の温もりに憧れた者と、つらい別れを経験した人との、どこか切なくてどこか滑稽な…不思議なやりとりだった。

「それじゃ、ぼちぼち今日のメインテーマと行くかっ！」

俺はそれまでの場の雰囲気完全に壊すように、わざと大きな声で元気よく仕切る。すると、真琴もすぐに反応した。

「えっ、なにになに？」

相変わらず明るい真琴はともかく、俺が天野の方に視線を向けると、天野は小さくうなずいてみせた。しんみりするるのが目的ではないのは、天野だって十分に承知しているってことだ。

「それじゃすぐに支度を始めますか？」

すっかりいつもの口調に戻った天野が尋ねると、真琴はきよとした様子で天野に訊き返す。

「支度って何をするの？」

『雪解け』

「え？ 真琴、あなた何も訊いてないの？」

真琴に質問された形になった天野の表情が少し強ばっている。と同時に、真琴には全然説明してなかった……と言うことを思い出した。が、今さら今回の趣旨を説明するのも何だかアホらしいので、この際細かい説明は天野に任せるとして、俺は静観しよう……って言うか、この場はひとまず逃げるとしよう。

「うん。祐一は後で教えるって言ってたけど、真琴は何をするのかなあ？」

「相沢さん……」

「ま、そーゆーわけなんで、真琴の準備よろしくな。俺は部屋の外で待ってるからさっ」
十分予想で来た困った表情の天野に向かって、軽く手を振りながら俺は素早く逃げるように部屋の外へと出ていった。

「相沢さんっ」

これまた珍しい天野の短い叫び声（ちよつと大げさだが）が響いたが、実際のところ、俺がいたら真琴の着替えなんてできやしないのだ。

ここの説明にしても、俺があれこれ言うよりも天野に言ってもらった方が真琴だっておとなしく従うに決まってる……なんてことは、天野もすぐに気づくだろう。

「用意ができたら、そっちから開けてくれよ」

部屋の扉越しにそれだけ告げると、ほどなく天野の短い返事が届いた。

「はい」

それからすぐに天野が真琴に今回のことを説明してららしく、話し声が続いていた。廊下に出た俺には、天野が何を言ってるのかまでは聞き取れないが、時折真琴の「うんっ」

とか「あーっ」などの返事が聞こえる。

どんな説明になつてゐるか気にはなるものの、俺が天野に任せただから、それはこの際しょうがない。ここに至つては、俺もただ待つしかないってなもんだ。

そうして、俺が廊下にどかっとなつて座つて待つてゐると、ふと紅茶の香りとともに誰かが近づき気がした。

俺が顔を上げると、お盆を片手に持った天野の母さんが立つていた。相変わらずにこやかな表情だったが、心なしか玄関で会つた時とは少し印象が違う。

「こんなところで、何してるの？」

「あ、ちよつと待つてるんですよ」

「美汐もお友だちを待たせるなんて、駄目よねえ」

俺が自分の状況を説明すると、天野の母さんは困つたように笑つて：部屋の扉に手を掛けた。しかし、そのまま開けてられて、二人に騒がれるのは俺の望むところじゃないので、あわてて補足する。

「そうじゃなくて、俺と一緒に来たやつも着替えてるんで：」

「そうだったの、それじゃ今は開けない方がいいわね」

天野の母さんはすぐに納得したように笑い、扉から手を離してくれた。何と云うか、こうした人の気持ちはちゃんとかみ取ってくれるのは、さすがに天野の母さんだと思つてしまう。言うまでもないが、天野はあれで本当によく気が回るからな。

「すみません、いきなり押し掛けちゃつて：」

別段とがめられることでもなかったのだが、何となくばつの悪さを感じて、俺が声を低

『雪解け』

くして謝ると、何故か天野の母さんも声を低くして返してくる。

「いえいえ、こちらこそすみませんね。……ここ何年もあの子がお友だちを連れてくることなんて、なかったものだから」

「そうですか……」

「あの子……美汐はあの通り不愛想な子ですけど、よろしくお願いします。あなたたちがどんな関係なのかは分からないけど、ここひと月くらいになってあの子が少しずつ笑顔を見せてくれるようになったのは、あなたたちのおかげだって……玄関で見た時にすぐに分かりました」

「えっ……」

思わず言葉を詰まらせてしまった。

そもそも俺は天野の家族のことを気にしたことはなかった。

天野がこれまでどんな風に過ごしてきた、あの時にどんな風にふさぎ込んでいたのかなんてことも。

俺には一番つらい時に何もかも分かってくれている天野がいた。それは本当にありがたかった。もちろん家族の支えが要らないってわけじゃないし、秋子さんや名雪にだってずいぶんと救われた。でも、同じ痛みを知ってるのとそうじゃないのでは、はつきり言うて違うのだ。

だから、家族がいくら支えようとしても……いくら分かつても叶わないのだから、天野はどんな思いでいたんだろう。その時、天野の家族はどんな思いでいたんだろう。

その答えは今、俺の目の前にあった。

『雪解け』

娘と同じ年頃の得体の知れない男に向かって、深々と頭を下げる女性の姿。それは自分の娘を思う親の、どうしようもないやり切れなさと、とてつもなく深く暖かい愛情に満ちていてた。母親がこう言う人だから、天野があんなに優しいのは当たり前だって言い切れるくらいだ。

「あの子のあんな風な表情なんて……本当に久しぶりで……それを見たら、本当に嬉しくなっちゃって……」

扉の向こうにいるはずの娘に聞こえないようにと、天野の母さんはずっと声を下げていたが、時折詰まってしまったのはそれとは関係ない。いくら俺が鈍くたって、それくらいは分かる。だから、俺は本当のことを飾らずにそのまま言った。

「俺は……別に何もしてないですよ。むしろ、俺の方が彼女に世話になってるくらいですから」

俺が言った後、ゆっくりとうなずいてから天野の母さんは微笑みながら、

「これからも……美汐をお願いしますね」

と、これまた小さな声で言った。

俺はそれに倣って小さい声で、短くはっきりと答えた。

「はい」

自分の中で、天野……美汐の存在が少しだけ変化するのを感じながら。

その後、俺は廊下で天野の母さんが持ってきてくれた紅茶を飲みながら、ひたすら待った。

ひたすら……と言う表現に誇張はないと思う。ゆっくりとカップを空けて、それからじっ

『雪解け』

と待っていたのに扉が開く気配は一向になく、気がつけば他のカップの紅茶はすっかり冷めていくくらい、じっと待っていたのだから。

どうして女の身支度はこうも手間がかかるのか……と怒りめいたものを感じた頃になって、心なしか疲れたような天野の声とともに、扉が静かに開いた。

「お待ちせしてすみませんでした」

さんざん待たされた俺は、天野の言葉の変化をあまり気にすることもなく、すっと立ち上がって部屋の中へと入っていく。

「ずいぶんと待たされたけど、一体何にそんな時間が……」

かかってんだよ……と文句を続けるはずだったのに、俺の口からはそれ以上は出なかった。えーっと……。

確かさっき天野の横をすり抜けて部屋に入ったはずで、俺の目の前には天野はいないはずだ。名雪と一緒に来てないはずだし、それ以外にここにおいて制服を着そうなやつと言ったら……誰だっけ？

「あうー……」

え？

真琴？ ああ、そう言えば一緒に来たよな。でもな……。

これが真琴？

俺の前について、恥ずかしそうに上目遣いで制服姿で立ってるのが？

「相沢さん、どうかしましたか？」

俺の横からするのは天野の声だ。

『雪解け』

「あうー……恥ずかしいよお……」

うん：確かにこれは真琴の声だし、髪型だって顔だって真琴のような気がするんだが、でもなあ……あの真琴がよりによって「恥ずかしがってる」だと？

真琴ってのは、なーんにも知らないガキのようなやつで、何でもかんでも俺と張り合おうとするやつだぜ？

「信じられん……」

「あうーっ、祐一の目つき……怖いよう」

って、ちょっと待て。

何が悲しくて、俺が真琴の制服姿を見て惚けなくちゃいけないのだ！

挙げ句の果てにはアブナイおじさんみたいな言われ方をするのは、実に気に入らない。

「って、おい、真琴！ お前こそ変に芝居がかった態度はやめろ」

「別に真琴、お芝居なんかしてないわよう」

「じゃあ、そんな格好するくらいで『恥ずかしいー』なんて言うな！」

「……あの、相沢さん……」

「恥ずかしいのは本当だもん！ 祐一だっけ入ってくるなり真琴の方をジーツと嫌らしい目つきで見えてたじゃないっ」

外見がどうであれ、やっぱりこいつはやかましいあの真琴に間違いない。そんなのに見とれるとは……俺もヤキが回ったな、ホントに……。

「だーれが嫌らしい目つきをしてた！」

「祐一に決まってるじゃないっ！」

『雪解け』

「…それに真琴も……」

「あれは単にびっくりしてただけだ」

「真琴には、じっくり見てるようにしか見えなかったわよっ」

「お前なあー」

「何ようっ」

「……けんかするほど仲がいいって言うけど、本当ですわね」

と、そこで俺と真琴の声が重なって、同時に止まる。

「えっ……」

割入った声の主は……もちろん天野しかおらず、俺が声のした方すなわち横を向くと、そ

こには……天野の笑顔があった。

「うーっ……仲がいいなんて言われても嬉しくないよう」

真琴が相変わらず反論してようだが、俺の横にいる天野の表情に比べたら、そんなことは全っ然大したことじゃない。

天野もこんな表情ができるんだから、もっともっとたくさんの方だちを作ればいいの……いや、その辺は俺が面倒見てやらないといけないよな。天野の母さんにもお願いされちゃったしな。まあ、ひとまずその話は俺の胸の中にしまっておくとして……

「それはそうと、真琴にはどう説明したんだ？」

「学校について多少は知っておくべきだと説明しました。でも……」

そこで天野の言葉が、かすかな苦笑とともにとぎれる。

「でも……」

『雪解け』

「いえ、制服を着せるのはなかなか大変でした」

天野が大変だったと言うからには、本当に大変だったのだろう。まあ、その原因のほとんどは真琴にあると思うけど。

「つて：真琴が嫌がったのか？」

「あうーっ：そんなことないけど……」

そんなに責めるような言い方はしてないつもりだったが、真琴の態度は今ひとつ煮え切らないもので、俺にはその理由がさっぱり思いつかない。

「背丈はそんなに違わないんですけど、別の問題があつて……」

「あーっ、美汐ちゃんそれ以上は言わない約束っ！」

「……と言うことなので、それ以上は言えませんが……」

俺に対して説明をしようとした天野を制するような真琴の行動……。それに、天野が言つてた「背丈ではなくて別の問題」となれば……。だ。まあ、恐らくはスリーサイズにおいて、天野と真琴には違いがあつたのだろう。何と言つても、真琴は華奢なようであり、それなりのポリウムが……。とそれはさておき、確かに何から何まで一緒と言うのも無理な話だし、多少の違いは無理矢理詰め込んでしまえばいいわけだし、ここで俺が余計なことを言つてもこじれるだけに決まつてる。

「よく分からないけど、色々と問題があつて時間がかかってしまった……と言うわけか」

「はい」

「それ以上は詮索しない方がよさそうだな」

「はい、その方が助かります」

『雪解け』

天野がそう言うからには、もしかしたら天野にとつても嬉しくない方にサイズの違いがあったのかも知れないが……これ以上の詮索はしないでおこう。

「それじゃ、そう言うことにして、まずは学校へと行くとするか？」

「そうですね。今回はそれが目的ですから」

「やれやれ：珍しくいい笑顔を見れたと思つたら、すっかりいつものおばさん臭い調子に戻ってるな」

「……………」

あれ？ 反論がない。俺としては、そんなにおかしなことを言つたつもりはないんだがな。

「ひよつとして怒つたか？」

「…いえ、そんなことはありません」

「まったく、祐一はいつもひとこと多いのよう！」

俺同様に（俺に向かって）余計なことを言ってるやつに言われたくはなかったが、とりあえずそれは無視するでしょう。

「そんじゃ、何黙ってたんだ？」

俺がそう訊くと、天野は困つたように笑いながら、答えた。

「本当に何でもありませんよ。ただ、ちよつと…ポーンとしてただけです」

名雪じゃあるまいし…ポーンとしてたと言うのは本当のことじゃない、と何故か俺は直感的にそう思つた。だが、天野がそう言ってる以上、俺が勝手な推測で反論するのも変だなと思ひ、俺はそれ以上続けるのをやめた。

『雪解け』

それから、俺たち三人は学校へと向かった。本来の目的が「真琴の高校生体験」なのだから、それが自然の流れと言うものだ。ちなみに、天野の様子はあれから特におかしなところもなく、真琴や俺と普通に会話を続けていた。

俺は二人の話に適当に相づちを打ちながら、ふと妙な感じにとらわれていた。

制服姿ではしゃぐ（片方に対しては正確な表現ではないが）二人。こんな風に学校に行くことは実際にはないはずで、いくら真琴が望んでも、真琴以外の誰もが望んでも、現実になることはない。それは十分に承知していることだ。

だけど、何だろう？

俺の前を歩く真琴と天野を見るたびに、暗くて重いものが俺にのしかかってくる。

真琴が帰ってきたのは確かに現実のことだ。でも、その真琴を現実社会は受け入れてくれない。俺たちが日頃気にしないでいる基本的なものが、真琴には何一つないのだ。そんなのがなくなつて、そりゃ生きてはいけるだろう。だけど、生活なんてできやしない。

だから、こんな風に俺が悩んだところで、こんな風に高校生のまねごとなんかさせたって、何の解決にはならない…。

そんなことは分かっていた。

…分かっていたんだ。

だけど、俺は…。

「祐一、遅いっ！」

「急いで行っても、学校は逃げやしないって。それよか、そんな格好で転ぶなよ！ その服だってお前のじゃないんだからな」

『雪解け』

「分かってるわよう」

「相沢さんも素直じゃないですね。服が心配じゃなくて、真琴を心配してるのが見え見えですよ」

「あうーっ…それは違うと思う」

俺は、ずっとこんなたわいのない日常の中にいたい、と思う。

真琴と、天野と、秋子さんと、名雪と、気の合う連中と…ずっと。

…：…そうだ。

ふと、思い出した。

今の俺の気持ちってのは、あの時とそんなに変わらないってことを。

真琴は俺の目の前にいるんだぜ？ 何でそんな気持ちになるんだよ。

って、今のまんまじゃちよつとやばそうだな。ちよつと真琴をこの場から外させないとな…。

「おい、真琴！」

「何よっ」

「ちよつと缶コーヒー買ってきてくれないか？ さっき通り過ぎたコンビニにさ、『黒樽

コーヒー』ってのがあったはずなんだ」

「何で真琴が行かなきゃいけないの？」

「五百円やるから、おつりで肉まん好きなだけ買っていいぞ」

「えっ、ホント？ うん、行く行くっ」

さっき通り過ぎたコンビニ…と言っても、実は十分以上前のことだが、真琴は肉まんに

『雪解け』

目がくらんで、そんなことも全然気にしていないようだ。

「じゃ、頼んだぞ」

「うんっ、任せておいて！」

俺が五百円玉を一枚渡すと、元氣よく走って行ってしまった。あの制服姿で走ってるので、時々下着が見えたりしたが、それも含めて実に真琴らしい。

さてと、真琴も行きは走っても帰りは肉まんを食べながら歩いてくるだろうから、これではしばらくは時間があるわけだ。

「どうしたんですか、急に」

突然の俺の行動に何かを感じた天野が、真琴の背中を見つめる俺に向かってそっと尋ねてきた。

「いや、ちょっと真琴には聞かされたくはない話でしたかったんだ」

俺がそう答えると、天野は少しだけ神妙な面もちになった。それだけ俺の方が真剣だったのかも知れない。

「はい」

「…俺って、ただのひきょう者なのかも知れないって思ったんだよ」

「どうしてですか？」

「こんなことしてるのって、真琴のためとか言いながら…本音は違うんだ…。さっきな、俺の前を歩くお前と真琴を見て、思い出したよ。ほんの少し前に同じような思いを感じてたってな…。で、俺はその時と同じようなことを繰り返しながら、その時みたいに自分が悲しい思いをするのはイヤだって言うだけなんだ」

『雪解け』

「相沢さん……」

「……なあ、天野。強くいてくれて、お前言ったよな？ ああ、そんな風になりたいさ。でもな……」

「……はい」

「たまには、こんな風になってもいいだろ？ だってよ……俺は……お前が思ってるほど強くはねえって……」

涙を流してゐる自覚はなかった。

でも、俺は泣いていたかも知れない。そして、それは天野には分かっていたのかも知れない。何故なら、不意に天野の表情がさつきまでの神妙な面もちから、それまで見たことがないやわらかい微笑みに変わっていたから。

「わたしでよかつたら……。何でも聞きますから、わたしでよかつたら……何でも話してください……」

そんなことを言ったら悪いかも知れないが、その時の天野はまるで母親みたいな感じがした。さすがに年下の女の子に諭されるようでは情けないとは思ったが、こんな天野も悪くはない。

「悪いな……。これじゃ、お前との約束も……駄目かな？」

「いえ……相沢さんなら大丈夫ですよ」

大丈夫って言われて、正直ホツとした。そう言えば、秋子さんもよく言ってくれるよな、大丈夫よって。

「ありがとうよ」

『雪解け』

「それに、あの子は帰ってきて、今ここにいないですか」

「そうだよな。それだけで十分なんだよな」

「あの子は相沢さんやものみの丘の狐たちの…希望なんですよ」

「希望？」

「だって、あの風がそう教えてくれたじゃないですか。奇跡を起こすのは悲しみや絶望じゃなくて、希望だって」

「そうだったな…」

「だから、あの子は大丈夫だと思うんです」

「そう…だよな」

もうここまで来ると、一体何が大丈夫で何が大丈夫じゃないのかなんて、野暮なことは言う必要ない。

大丈夫って言うからには、きっと大丈夫なんだ。

…そうだよな。

そうかも知れない…と言う思いに至ってしまったえば、さっきまで感じていた暗くて重いものなんてのはなくなるに決まってるし、さっきよりも確かに俺の心は軽くなった。天野がいてくれて、本当によかったと思う。

と、不意に天野が通りの方を見て、かすかに笑いながら言った。

「真琴が戻ってきましたよ」

天野の声に俺が通りの方を見ると、確かに真琴がこっちに向かって走っているのが分かった。手には肉まんの入った袋を持っている。

『雪解け』

「意外に早かったな」

「…あの子が、自分だけ肉まんを食べるような子だっと思ってたんですか？」

「それでもかまわなかったんだけどな」

「でも、あの子は一人で食べるよりも、みんなで食べる方がおいしいんだってことを知っていますから」

「なるほどね、そりや確かにそうだ」

「そうこう話しているうちにも真琴はどんどん近づいてきて、やがて声が届く距離になった。」

「美汐ちゃん、肉まん一緒に食べようねーっ」

「どう考えてもそれは高校生の言動とは思えなかったが、真琴だからしょうがないと思う…と言うか、思わず俺も天野も苦笑をしてしまうのだった。」

「大声で名前を呼ばれるのは…ちょっと恥ずかしいですね」

「まあ、いいじゃないか。俺なんか、金を出しているのに、そう言われないんだからな」

「俺と天野がお互いに苦笑を見せ合ったところに、真琴が走り込んできた。」

「お待たせー」

「走ってくることもなかったのに、転んだらどうすんだよ、お前は」

「何よう、せつかく温かいウチに戻ろうと思ってたのに」

「そっか…、ありがとよ。で、コーヒーは？」

「本音としては特にコーヒーが飲みたかったわけではないが、せつかく（俺の金で）買ってきてくれたのだから、ここはコーヒーでももらおうとしよう。」

『雪解け』

と、俺が手を差し出すと、真琴は笑顔でその手に肉まんを乗せてくれた。

「はい、肉まん」

「……何故に肉まん？」

コーヒーが飲みたかったわけではない……と言うものの、期待して手を出したら、全然別の物が乗ってきてしまつては釈然としない。だが、真琴はそんな俺には一向にかまわずに天野に肉まんを渡している。

「それから、美汐ちゃんに分」

「ありがとう」

「で、これは真琴の分っ」

「……おい、コーヒーは？」

「ああ、あれ？ ないよ」

「ない？」

「うん、店員さんに聞いたら、『そんなのないですよ』って言われちゃったから」

「それで、お前……」

「だから、全部肉まん買っちゃった」

「……そう言う時は、別の銘柄でもいいから、コーヒー買っとくもんだろ？」

「そうならそうと言ってくれればいーじゃない」

「相沢さん……」

普通はそう言わなくても買ってくれるもんだ……と言う思いはあつたが、さすがに相手が真琴ではそれが通用しない。おまけに、天野のやつが俺を制止するような目配せなんかを

『雪解け』

したりするもんだから、俺としては何も言い返せない。

「…ま、いいけどな」

「うんっ、真琴は悪くないもんっ」

悪くないかどうかはこの際おいとくとして、確かに真琴らしい…の一語に尽きると言うものだ。

それから俺たちは学校へと行き、学食や校舎に中庭なんかを適当に歩き回ってみた。真琴は特に学食には興味を示していたが「肉まんはない」のひとことで、一気に興味はさめたようだった。

天野の家からの帰り道、真琴はずっと嬉しそうに鼻歌なんかを歌っていた。

真琴が今日のことをどう思ったのかはよく分からないが、それでも単純に楽しい時間を過ごせたとは思う。これから先にもこんな時間なんて、いくらでもあることを…期待しながら、俺は真琴と一緒に家へと帰った。

家に帰ると、名雪だけしかいなかった。どうやら秋子さんは仕事と言って外出してらしい。それに「今日、役所に行く」と言っていたので、それもあるんだろう。

昨日みたいに「行く時間がなかった」と言うこともあるが、それは結局先延ばしになるだけで、事態は全然変わらない。

と、俺がぼんやり過ごしていると、玄関から誰かの声があった。

「ただいま」

それは秋子さんの声だった。すると、真琴はすぐに玄関へと走って行き、元気に答えていた。俺が止める間もない素早さで。

『雪解け』

「お帰りなさいっ、秋子さん」

こうなってしまった後は、俺が一番恐れていたことさえ起きなければそれでいい…必死にそう願って俺も真琴を追って玄關へと向かう。が、それは実に簡単に崩れ去ってしまった。

「ねえ、秋子さん、真琴の戸籍ってどうなったの？」

よりによって真琴自らがそんなことを言っている始末なのだから、救いようがない。このお調子者がっ！

後は秋子さんがうまく返事をしてくれることを期待するのみで、俺も覚悟を決めるしかない。

だが……、

秋子さんの返事は俺の予想と期待を完全に裏切ってくれたのだった。

「ちよつと待ってね、今出して見せるから」

……え？

今、秋子さんは何て言ったんだろう？

いつもの優しい笑顔で、真琴に向かって、何て答えた？

『ちよつと待ってね、今出して見せるから』…だって？ ど、どうして、見せるなんて言えるんだ？ まさか本当に秋子さん、ねつ造しちゃったのか？

「秋子さん…もしかして梁山泊（パチプロ集団にあらず）に知り合いでもいるんですか？」

呆然としながら、俺が秋子さんに向かって訊くと、秋子さんはくすくすと笑いながら、

『雪解け』

ごく簡単に返してきた。

「よく分からないけど、それはどんな冗談なの？」

冗談でそんなことを言ったつもりはなかった。何でもできてしまう秋子さんのことだから、それくらい朝飯前かも知れないと、俺は真剣だったのだ。

「だって、真琴の戸籍って……」

「ああ、あれはね、窓口で調べてもらったら、真琴のがちゃんとあったって言うだけなのよ」

「え………」

「だから、心配いらないうって言ったでしょ？」

「ど、どーして……そんなものが……」

「あら？ 祐一さんも聞いたんじゃないの？ あの風の約束……」

「！………」

「もはや「目が点」と言う状態のまま、俺は完全に言葉を失った。まさかあの風の約束がここまで面倒を見てくれたとは、思いもよらなかつた……」

「ねえ、秋子さん、お腹すいたーっ！」

「はいはい、それじゃすぐに支度するわね」

「真琴も手伝うっ……あれ？ 祐一は何ボケッとしてるの？」

「！………」

真琴が何か言ってるけど、そんなことはどうでもいい。

そっか……思い返せば、天野が妙に俺の行動を不思議がってたわけもこれで納得しちま

『雪解け』

うな。それに「あの子は希望だから」なんて言ってたっけ。つまりは、天野も秋子さんと同じようにこうなることを感じていたってわけだ。

で？

け…結局、俺の悩みは何だったんだよ……。

まるっきり無意味？

…取り越し苦労？ って、俺は一体何をしてたんだかなあ……。

「は……ははは……」

「うわあっ！ 秋子さーん、祐一がヘンになっちゃったあ！」

「ははははははは……」

ちくしょー……。

もう笑いしか出てこねえや。

「あうーっ…祐一、怖いよ……」

「ははははははは……はっはっはっはっは……」

いや、もう、何にも言うことはねえよ、本当にさ。

こうなったら、俺には怖いもんはねえって。

「わあっ！ ちよ、ちよと祐一何するのようっ」

俺が真琴の小さくて…思ったよりも華奢な体を抱え込むようにすると、真琴はびっくりして声を上げた。

「何でもねえよ」

「だったら、離してよっ！」

『雪解け』

と言う割には真琴も本気で俺から逃げようとはしていない……って言うか、そんなことはこの際どうでもいいのだ。

「まあ、たまにはいいじゃねえか」

「あうーっ、秋子さん助けてー」

真琴は手を伸ばしながら言うものの、それも本気ではないだろう。だって、それを聞いても秋子さんは、

「本当に仲がいいのね」

と、いつもの笑顔で楽しそうに答えるだけだったから。うん、さすがに秋子さんは分かっているぜ。

「あうーっ……」

秋子さんも助けてくれそうにないのを見て、真琴のやつもようやく観念したらしく、それ以上暴れなくなった。その時の真琴がどんな表情でいたのなんて俺には分からなかったけど、そんなことは大した問題じゃないんだ。

記憶がない？

自分のことがよく分かってない？

ははっ！ そんなことだって大した問題じゃないさ。

何故なら、こいつは間違いなく今ここにいるわけで、それは勝手に消えたりすることもなく、れっきとした沢渡真琴と言う存在なわけで……って、小難しいことはどうでもいい。

真琴がいて、天野がいて、秋子さんがいて、名雪がいて、気の合う連中がいて、みんな引くくためて、たわいのない日常が本当にずっと続く……そう言うことなんだよな。

『雪解け』

——さて、後日談だ。

こうして真琴の高校通いには何の障害もないように思えたのだが、それはつかの間の幻想に過ぎなかった。

真琴の年齢は十六歳と言うことになっていた（俺が真琴キツネと出会った頃から考えると、ほぼキツネの年齢に二を掛けたようだが……）し、正式に水瀬家の養女と言うことになっていて、そう言う意味では全然問題がなかった。

そう、そこまではまさに完璧だった。だが、俺は最大の問題を失念していた。

「この馬鹿たれがっ！」

「ボンボン頭を殴らないでよっ」

「ええー！ーい！ 小学校の問題集も解けないくせに、高校行きたいなんて言うアホなやつ頭なんぞいくら叩いても構わないのだ！」

「あうー…だって、それはしょうがないじゃないー…」

そうなのだ。

真琴の学力が…決定的に追いついていなかったりするのだ。

「祐一の教え方が悪いのよっ！ 名雪さんとか秋子さんはもっとう優しく教えてくれたもんなっ」

まあ、そんなわけで、名雪と秋子さんにも協力を頼んで、真琴の受験勉強をしているのだが、俺の受け持ちになるとどうも口答えが多い。もちろん俺はそんな時は、真琴の頭を軽くはたくわけだ。

「黙ってやれ！」

『雪解け』

「あーっ：祐一、さっきから真琴の頭を殴ってばっかり……」

鉛筆をカタツと問題集の上に置くと、真琴は自分の頭に手を当てて、思いつきり不平を漏らした。

確かにいきなり勉強ラッシュになったのは、無理があるとは思う。だけど…だけど、俺は俺でもすごく釈然としないのだ。

「お前がもうちよつと勉強できりゃ叩きはしないって…」

「だって分らないんだから、本当にしょうがないじゃない…」

「そりゃ分かるっ！ 分かるけどなあ、俺には俺の予定ってもんが……」

「予定？」

「何でもねえよ！ いいから、ほら、続きをやれって」

「予定って何なのよう」

「あああああ、うるさいなっ！ 俺の予定ってのはだな……」

俺の予定って……何のことはない、真琴と一緒にいけば天野だってもっと明るくなるだろうし、それにな…って、これ以上こんな恥ずかしい話を続けられるかってんだ。大体、真琴が全然分かっちゃいないんだから。

まあ、どっちにしても、この調子じゃ真琴が編入試験をパスする確率はかなり低いのは間違いない。俺でさえ受かった…と言うのは不本意だが、そう言って真琴に発破を掛けたのももう限度だろうな。

でも、な…。

この先どうなるか…なんてのは確かに心配だけど、それでもたぶん、真琴も俺たちも大

『雪解け』

丈夫だと思う。

だって、真琴が高校に行けなくても、真琴が消えたりするわけじゃないんだからな。
真琴とはこれからはずっと一緒に生きていける……それだけで十分だよな、ホントにさ。

『雪解け』

『雪解け』あとがき

作中の時期がはっきりしないと思われるかも知れませんが、『風の約束』からほんの二、三日後の話です。

具体的には四月上旬を想定しているのですが、真冬の気温が氷点下になるようなところで、四月に春という感覚になるのかどうかはよく分かりません。

今回の話ですが、書いてみて改めて感じたのは、テーマ二つになってしまったと言うことです。一つは真琴の実生活における明確な背景の確立で、もう一つは天野美汐との関係の変化です。

もちろんメインは真琴の方ですが、美汐との関係も重要なテーマであり、どちらかに絞る／別の話にすると言う方向でもまとまらなかったで、どちらか一つに絞りきれなかったのが悪かったのかどうかは読まれた方それぞれに委ねるとします。

さて、真琴のテーマですが、今回こうした話を書いたのは真琴の実生活レベルにおけるきちんとした背景を確立させておきたかった……と言う作者の強い思いがあったからです。

そう言いながらも、あえて明確にしなかった部分もあります。真琴の誕生日や本籍、家族構成などです。実を言うと、戸籍云々の下りはかなり悩んだところでありまして、必要以上に現実的な背景を描いても、作品として成立しなくなるとの結論に至り、このようになりました。

実際のところ、それら詳細な情報は必要ではないかも知れません。でも、真琴がいるのは誰か（たとえば、あゆなど）の夢の中ではなくて、秋子さんや真琴たちが生きている、

『雪解け』

れっきとした現実なのです。それだけに現実社会に生きるために欠かせない物はきちんと用意しなくてはいけないと思いました。

でも、そのために非現実的な手段を使ってしまったので、これは御都合主義の典型と評されるかも知れませんね。でも、それはそれで私にはこうした展開しか思いつかなかったのでしょうか。どうしようもありません。

そもそも、「登場人物の中の」誰かの夢の話ではない」と言っておきながら、この一連の物語は結局のところ**私の夢物語**でしかないんですから。そして、書けば書くほど……原作と離れば離れるほど、これが夢物語なのだと思知らされるばかりですが、何故でしょう……。

でも……どんな形であっても、真琴には消えて欲しくなかった私としては、これからも自分だけの夢物語を見続けると思います。それが単なる現実逃避でしかないとしても。

二〇〇〇年二月四日 記

第二版あとがき

全体的な見直しをしました。また、初期の構想では含まれていた部分を追加しました。

二〇〇〇年二月二十日 記

2000/02/04 初版 ash

2000/02/20 二版 ash

PDF書式変更:2016/05/15